

# 30amF-496

マウスを用いたロキソニン S®錠の乳汁移行性の予測

○山崎 裕己<sup>1</sup>, 古前 竜平<sup>1</sup>, 小森 浩二<sup>1</sup>(<sup>1</sup>摂南大薬)

【目的】2011年1月、医療用解熱鎮痛剤「ロキソニン」が「ロキソニン-S錠」としてOTC医薬品に承認された。薬剤師として患者への情報提供は重要だが、ロキソプロフェン（「ロキソニン」）は乳汁への移行性の情報が十分とは言えない。本研究は乳汁への移行性を解析する簡便な分析法を確立し、マウスに投与してロキソプロフェンとアスピリン、及びイブプロフェンの乳汁の移行性を比較した。

【方法】分析法として泌乳マウス（ddY系）に対し、ロキソプロフェンを12 mg/kg、アスピリンを132 mg/kg、イブプロフェンを30 mg/kg 経口投与後、血液及び乳汁を採取した。血液及び乳汁10 µLにエタノール20 µLを添加し、遠心分離（12000 g × 15 min）した上清をHPLCで分析した。ただし、アスピリンは体内でただちに代謝されるためサリチル酸を分析した。

【結果】ロキソプロフェンは経口投与後15分で最高血中濃度（2.9 µg/mL）を示した。乳汁中濃度は0.5 µg/mLであり、その後速やかに代謝された。一方、サリチル酸は経口投与後30分で最高血中濃度（187.2 µg/mL）を示した。乳汁中濃度は64.4 µg/mLであり、それらの濃度は60から120分まで維持され、240分後もサリチル酸が検出出来た。イブプロフェンの血中濃度は経口投与後15分で最高を示し、ロキソニンに比べ代謝は緩徐であった。240分後もイブプロフェンが検出出来た。

【結論及び考察】本結果がマウスの薬物動態とヒトとは異なるものの、ロキソプロフェンはアスピリンやイブプロフェンに比べ代謝されやすく乳汁移行性は低いことが示唆された。現在、本手法をヒトに適用しロキソニンSの乳汁移行性を検討している。